



Anchor アンカー



INSIDE

安息日の意義

11号

1992年1月

安息日の意義

デビット・ミラー

クリスチャンになって以来、私は他教派に属する様々なクリスチャンに出会ってきた。彼らの多くは私に向かって「アドベンチストの人達は律法主義者で、彼らが旧約聖書の安息日を守っていることが、その証拠である」と言っていた。私はこのようなたぐいの挑戦には、いつでも受けて立つことにしている。私は彼らに向かって、まず信仰による義認の教理、すなわち第3天使の使命の話から始める（「アンカー第9号」参照）。

このようなことを言ってくる人は大抵、救われるために何故安息日やその他すべての十戒を守るべきなのかを、私が言うと思っている。それよりも、イエスが私のために死んで下さったこと、そして安息日や十戒の、どの戒めを守ることにしても、私は自分自身を救うことができないと、私は彼らに言う。

多くの場合、彼らは不信の目で私を見つめる。セブンスター・アドベンチスト信者は、行いによる義認を教えていると、彼らは教えられており、そうだと固く信じているのである。良くても、信仰プラス行いによる義認だと言うだろう。

私が彼らに対してする答は、次のようなものである：イエスは私のために死んで下さった。そして彼の生命と死が私に与えられた。イエスの内にあって、私は罪を全く犯さなかった者のように、現在もまたいつでも神の前に立つことができる。神は私の内に、罪の利己的精神ではなく、イエスの完全な義を見られる。この状態にあって、私はヨハネのように、「永遠のいのちを持っている」（ヨハネ 5: 13）と確信を持って言うことができる。

私は彼らに、安息日は天地創造のときに与えられたもので、それは神が人間を肉体的にも精神的（霊的）にも完全に造られたことを、神の方法で記念することである、と言う。創造なされたのは神であり、人間ではない。6日目まで、人は存在すらしなかった。故に地球や自分自身の内の完全さは、全く人の手柄にはなり得えないのである。安息日は神の完全な創造の業を記念するために、聖別されたのである。

神の業のしるし

安息日は、神の完全な御業のしるしとして、すべての人が守らなければならなかった。またそれは我々が自分自身を造り出すことができないように、自分自身の精神も完全にすることができないことを、我々に覚えさせる

ためでもあった。

進化論はこの根本的なキリスト教の真理に、真っ向から反対するものである。人は微小な生命体から自然発生し、外からの干渉を受けることなく今日の形態にまで進化してきたと、進化論は主張する。進化を受け入れると、人は自らをその創造主とし、神に対するいかなる責任をも拒むようになる。

安息日は、神と人との間で、神だけが完全な人間を造ることがおできになるということのしるしでもあった。それはまた、神は人を完全な者に再創造することがおできになるということのしるしでもあった。

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである」（エゼキエル章 20:12）。

安息日は神の完全な創造の御業を指し示すだけでなく、神が人を神の御像（かたち）に回復されるとの、神の完全な創造の御業をも指し示している。

「創造主であられる神を指し示すしるしとして世に与えられた安息日は、罪を清めるお方であられる方を指し示すしるしでもある。すべてのものを造られた力は、魂を彼に似る者に再創造する力なのである（教会へのあかし 6、350 頁）。

安息日は記念の日

最初の安息日は、休みの日であった。その安息日を守ったのは、創造主なる神とその創造物であるアダムであった。彼らは神の完全な創造の御業を記念するために休んだ。主なる神は、世界と人間を完全な状態に想像なされた。そこには罪も腐敗も、悲しみも病気も死もなかった。創造は神の業であり、人はそれに全く関与していなかった。創造の完全さはすべて、神の手柄によるものであった。人は完全ではあったが、それについて人は全く関与していなかった。神がその創造主一完成者であった。人を、完全で、尊く清い状態に造られたのは神であった。最初の安息日に、神と人はこの完全に造られた世界を、神がお造りになった世界を祝うために休んだのである。

人は神を必要とする

アダムが罪を犯して以来、人は墮落した状態にあり、創造されたときに備え持っていた純潔と清さは失われてしまっている。人は神のゆるしと神性の再取り付け、そして聖化と変えられた生命を必要としている。

アダムはサタンを信じ込み、神が自らの内に住まわれて彼を助けることなく、神から離れて生きることができると考えた。彼は自分が「神（神々）のように善悪を知る者となる」と考えた。彼は自分勝手に律法を選ぶことができると考えた。彼は自ら神になって、自らのルールを作り出すことができると考え、彼は神に従わないことを選んだのである。

神はアダムが永久に失われるままに放って置かれることができなかつた。そこで救済の計画を立てることが必要となった。神御自身が介入して、救出しなければならなかつた。人が完全な生涯を送れるのはただ神の力によるものであることを、人は理解する必要があつた。神の助けによってのみ、人は回復され得るのである。それはつまり：人が全く清められるためには、神が彼の生命の内に働きかけて、彼の内に純潔な生命を作り出さなければならぬ、ということである。

神はしるしを与えられた

神はこの関係を示すしるしを作られ、それをエゼキエル書の中に記された：

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。」(エゼキエル書 20:12)

安息日は神のしるし、神の軍旗、旗じるしである。それは神とその民を密接に結びつけるものである。それは彼らが神の側にいて、神に属していることを示すものである。

「古代イスラエル人が地上のカナンに入るためにエジプトから出てきたとき、安息日は彼らを識別するしるしであったように、今日でも安息日は、神の民が天の休みに入るために世からでてくるとき、彼らを識別するしるしとなるのである。安息日は、神とその民の間に存在する関係を示すしるしであり、彼らが神の律法を尊重するしるしである。それは神の忠実な臣民と違法者を区別するものである。…創造主であられる神を指し示すしるしとして世に与えられた安息日は、罪を清めるお方であられる神を指し示すしるしでもある。すべてのものを造られた力は、魂を彼に似る者に再創造する力なのである。安息日を聖なる日として守る者達にとってそれは聖化のしるしとなる。真の聖化とは、神との調和、すなわち品性において神と1つになることである。それは、神の品

性の写しであるこれらの原則に従うことによって受けられる。つまり安息日は、従順を示すしるしなのである。第4の戒めに心から従う者は、すべての律法を守るようになるであろう。その人は従うことを通して聖化されるのである。」(6 T、350 頁)

モーセと安息日のテスト

紀元前1445年頃、神はモーセに、イスラエル国民をエジプトから連れ出しなさいと言われた。エジプトからの旅の途中で、彼らは荒野を通らねばならなかつた。そこには水も食物もなかつた。水と食物の両方を彼らに与えるのが、神の務めであつた。神に信頼することが、彼らの務めであつた。

彼らがマナを集めるとき、神は彼らに安息日を守るよいうにという指示をお与えになつた。イスラエルの子らは、週の6日の間マナを集めたが、安息日には何も与えられなかつた。6日目には倍の量のマナが見つかって集められ、そのマナは翌日まで新鮮さを保つた。金曜日以外の日に2倍の量のマナが集められたときには、翌日まで置かれたマナは、虫がついて腐ってしまった。このようにして40年間、真の安息日の証拠がイスラエルに与えられたのである。

この天からの賜り物にどのように対応するかによって、民はその従順さを試された：

「見よ、わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう。民は出て日々の分を日ごとに集めなければならぬ。こうして彼らがわたしの律法に従うかどうかを試みよう。…」(出エジプト記 16: 4)

「6日目には、彼らは2倍のパン、すなわちひとりに2オメルを集めた。そこで、会衆の長たちは皆きて、モーセに告げたが、モーセは彼らに言った『主の語られたのはこうである、「あすは主の聖安息日で休みである。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残つたものはみな朝までたくわえて保存しなさい」と』(22、23 節)

民が神に従わないで、安息日に外へ出て食物を探すと、次のような有様であつた：

「ところが民のうちには、7日目に出て集めようとした者があつたが、獲られなかつた。」(27 節)

当時の様に、今でも安息日は、神の子らが神のすべての戒めを守るか否かを試す、服従のテストである。もしイスラエル人が神に信頼して、金曜日に2倍のマナを集め、安息日にそれを集めようとしなかつたら彼らはテストに合格したのであつた。第7日安息日が試験の採点規準であつた。神にとって、安息日を守るか破るかという

ことが、民がすべての戒めを守っているか否かを示す規準となったのである。十戒のうちの1つが、10の戒めすべてのテストとなった。安息日にマナを集めに出た者達に向かって、神は次のように言われた：

「そこで、主はモーセに言われた、『あなたがたは、いつまでわたしの戒め(複数)と、律法を守ることを拒むのか。』(28節)

安息日にマナを集めに出て行かないことによって、イスラエルの子らは神の言葉に対する彼らの信頼を示したのである。安息日にマナは降らないと神が言われたので、マナはないと彼らは信じたのである。

安息日にマナを集めに出て行くことによって、神に従わなかった者達は、「神が超自然の方法で、6日間マナを降らせられたのではない」と言ったことになる。そうすることによって彼らは神の保護を否定したのである。つまり彼らは、「マナが降ったのは自然現象であって、神が安息日にそれを押しとどめられることはない」と言ったことになるのである。神が彼らのためにマナを与えられたのではないと言って彼らは神に従うようにとの御要求を拒んだのである。

外に出て行った者達は、神に信頼していなかった。彼らは神の言葉を拒んだ。彼らは創造主であられ、全生命の源であられるお方として神を受け入れることを拒むことによって、アダムとエバの罪を繰り返していたのである。アダムとエバのように、彼らは何でも自分の方法でやろうと望み、神の恵みに支えられて生きることを拒んだ。彼らは神のようになりたいと望んだ。一自分で律法を作り、自ら神でありたいと望んだのである。

ホワイト夫人は次のように述べている：

「十戒の中でも安息日は、生ける神の印、律法の授与者であるお方を指し示すもの、またそのお方の支配権を知らせるものとして与えられた戒めである。それは神とその民の間のしるし、また神に対する忠誠を試すものであった。モーセは主から、民に言うように命じられた：『あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわたるしるしであって、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである』と。また民のある者たちが、安息日にマナを集めに出て行くと、主は次のように言われた：『あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか。』(サインズオブザタイムズ、1886年5月13日、「イスラエルと律法」)

安息日は神のしるし、印、そして我々の従順さを試

すものである。我々が安息日を受け入れるとき、我々は神を受け入れ、我々が神に属することを表明していることになる。もし安息日を喜んで守るならば、我々は自分達が神に属することを表明しているのである。

「わが安息日を聖別せよ。これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである。」(エゼキエル書 20:20)

これは永遠にわたるしるしである。創造の業を休まれたとき、神は我々のために模範を残されたのである。神は次のように言われる：

「…これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。それは主が6日のあいだに天地を造り、7日目に休み、かつ、いこわれたからである。」(出エジプト記 31:17)

これは神の救いのみ業を示すしるしである。それは我々に、神が人類の救い主であられると、述べている。エジプトは罪の奴隷を象徴し、カナンの地を天国を象徴するものだとすれば、安息日は民をエジプトにおける奴隷の身一罪から解放するしるしであったとすることができる：

「あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。」(申命記 5:15)

神旗

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。」(エゼキエル書 20:12)

聖化とは、罪の刑罰からでなく、罪の呪い、すなわち罪を犯す行為から罪人を救う働きのことである。ある人には安息日遵守は、救いへと導く働きのように思われるかも知れないが、そうではない。神の聖日を守ることは、神だけが完全な創造の御業と人間の回復の責任者であられることを、この地球を見守っている全宇宙の前で、言い表すことなのである。

安息日はいつの時代においても、神の創造力のしるしとなってきた。天地創造の第7日目に、神と人が神の完全な創造の御業を記念するために休んだのである。それは今日でも、神が人をその御像に再び創造なさるであろうということを示すしるしなのである。神は14万4000人の内に御自身の御像を再創造なさる

であろう（黙示録7章、14章参照）。安息日は、神が世の終りに、世界を再び完全な状態に創造なさることを示すしるしなのである。

救われた者達は、神が彼らの内になされた回復の御業のしるしとして、天国でも永遠に安息日を守るであろう。安息日はすなわち神の印である。それを受ける者は、神に属するのである。それは神の旗一旗じるしである。」（後に引用するセレクトッド・メッセージ第2巻、385頁参照）

反キリストの旗

安息日は神の旗一旗じるしである。同様に、サタンにもしるしがある。それは目に見える行為においても、内面的な行為においても、神のしるしとは正反対のものである。神のしるし（安息日）は、神に対する我々の信頼、神だけが救い主であり、我々を罪から清められるお方であることを、我々が心から信じているというしるしである。

サタンのしるしは、これと正反対のことを主張する。それは人間によって定められた日であって、我々はその日、すなわち日曜日を守ることによって自分自身を救うことができると主張する（各時代の争闘下巻169頁参照）。最終時代には、日曜休業令が施行されることを我々は知っている。この人間の作り出した法律が、服従を要求する行動に出るのである。これは神に敬意を表するという口実の下で造られるであろう。世界は混乱に陥るのである。日曜休業令を守ることは、すなわち神を喜ばせることであり、それによって世界中が神の祝福を受けると言われるであろう。その法律は祝福ではなく、かつては特別に祝福された国に、かえって荒廃をもたらすであろう。それはアメリカ合衆国中に、背信をもたらすであろう（各時代の争闘下巻338、3493頁参照）。

その時に日曜日を守ることは、肉の行いによって（行いによる救い）神の承認を得ようと試みることになる。一方安息日を守ることは、（信仰によってのみ）神の救いの内に憩うことになる。日曜日は口一マの権威とその裏に隠されている権力のしるしであり、安息日は神の権威のしるしなのである。

義認か、それとも聖化か？

これまで聖化と、安息日がどう関わっているかについて述べてきた。最終時代には、安息日か日曜日のどちらを守るかを、テストされることを我々は知っている。このことについてはヨハネの黙示録14章にある第三天使の使命のところで述べられている。そこに

は獣の刻印のことが書かれている。これは神の印とは対照的なものである。安息日を守るか、日曜日を守るかによってどちらかの印を受け、このテストは我々が神の律法を守るか否かを明らかにするものなので、第3天使の使命は聖化の働きであるとも言えるかもしれない。しかしながらホワイ夫人は、第3天使の使命は信仰による義認であると述べている（レビュー・アンド・ヘラルド、1890年4月1日参照）。

何故聖化ではなくて、義認なのか？聖化される前に、まず我々は義認を受けなければならないことを覚える必要がある。信仰による義認と獣の刻印の関わりについては、次のように説明することができる：世の終りの裁きにおいて、安息日と日曜日のテストがやって来る。そしてそれは我々が信仰によってのみ義認されているか、それとも自分自身の行いに頼っているかについてのテストとなるであろう。安息日は神の方法、神の救いを象徴している。日曜日はサタンの方法、すなわち自分自身の行いによる自己義認を象徴している。信仰による義認の教理をどのように適応するかに従って、我々の裁きは決定づけられるのである。裁きに合格すれば、莫大な量の（聖）霊が注がれるであろう。これを後の雨と呼ぶのである。この回復の働きは、我々を再臨のときに主にお会いするのにふさわしい者とする（TM、506頁）。

裁きにおいて、我々は信仰によってのみ義と認められ、それは我々が義を行ったからでも、完全な者となったからですらない。但し、善行は確かに伴うであろう。我々が義と認められるのは、我々の内に聖霊が住まわれるからでもない。神は御子の生涯と死によってのみ我々を義なる者としておできになる、という事実を信じる信仰によって、我々は義と認められるのである。神は御自身の御像に型どって、我々を再創造なさることがおできになることを、我々は知っている。この信仰が神の創造力を捕らえるのであるが、それは我々の内に働いて我々を義認へと導く聖霊に我々が信頼したためではない。キリストの生涯と死のみに信仰を置く義認を受け入れない限り、我々が全く清められた生命の再創造を受けることは有り得ない。これは聖化の原因（信仰のみ）か、それとも結果（聖霊の内住）かのどちらに信頼を置くかの問題なのである。義認も聖化も含め、すべての賜物は神から来る。すべては信仰によってのみ与えられるのである。

そもそも義認と聖化は、本質を異にするものであるが、これらが別々に与えられることはない。義とされていなければ、清められることはない。一方、神の清めの働きを喜んで受け入れない限り、義とされることもない（口一マ2:13）。最終時代の闘いは、戒めに関するものである。十戒を完全に守ることが、すなわち完全な聖化である。世の多くの教会は、義とされることを望んでいるが、清められることを望んではいない。

安息日の戒めと、安息日か日曜日かのテストは、義認と聖化の両方を包含している。このテストがまさしく、全時代にわたる全人類にとってのテストとなるのである。これがキリストとサタンの間でなされている大争闘のクライマックスなのである。これは、神こそは義なるお方、創造主であられること、そして神が常に正しく、今まで正しかったこと、また神だけが救いの御業を成し遂げることがおできになり、地球を見守っている全宇宙に、示すものなのである。神は愛である。

結論

そういう訳で、あなたが安息日を守っているからといって、誰かがあなたを律法主義者呼ばわりするとき、あなたはそこに、創造主であり再創造主、そして信仰によってのみ救われている者を清められるお方であられる、神のすばらしい力について話してあげればよい。結局のところ、安息日は休息、停止の日のことである。それは、神のなさる義認の御業に信頼を置くという我々の業を停止させることをいう。

つまりこれは、神の働きであって、我々の働きではないのである。神の義認の御業は、完全に我々の管轄外のことなのである。それは我々の身代りとなって生き、死んで下さった、イエスの御業なのである。

あなたを律法者呼ばわりする人にこう言うといよい：「私は神の完全な御業に信頼するために、自分の業を止めているのです」と。「キリストは、すべて信じるものに義を得させるために、律法の終りとなられたのである」（ローマ 10:4）。安息日を守ることは、あなたが神の子であることを示すしとなることを、その人に伝えるといよい。

ヘブル人への手紙の著者は、このように表現している：

「それだから、神の安息にはいるべき約束が、まだ（我々のために）存続しているにかかわらず、万一にも、はいりそこなう者が、あなたがたの中から出ることがないように、注意しようではないか。というのは、彼らと同じく、わたしたちにも福音が伝えられているのである。しかし、その聞いた御言は、彼らには無益であった。それが（それを）聞いた者たちに、信仰によって結びつけられなかったからである。ところが、わたしたち信じている者は、安息にはいることができる。それは、

『わたしが怒って、彼らをわたしの安息に、はいらせることはしないと、誓ったように』

と言われているとおりである。しかも、みわざは世の初めに、でき上がっていた。すなわち、聖書のある

箇所では7日目のことについて、『神は、7日目にすべてのわざをやめて休まれた』と言われており、またここで、『彼らをわたしの安息に、はいらせることはしない』と言われている。そこで、その安息にはいる機会が、人々になお残されているのであり、しかも、初めに福音を伝えられた人々は、不従順のゆえに、はいることをしなかったのであるから、神は、あらためて、ある日を『きょう』として定め、長く時がたってから、先に引用したとおり、『きょう、み声を聞いたなら、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない』とダビデをとおして言われたのである。もしヨシュアが彼らを休ませていたとすれば、神はあとになって、ほかの日のことについて語られたはずはない。こういう訳で、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである。

なぜなら、神の安息にはいった者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだからである。したがって、わたしたちは、この安息にはいるように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にならって、落ちて行く者が出るかもしれない。（ヘブル 4: 1-11）

安息日の重要性について、ホワイト夫人は次のように述べている：

「セブンスデー・アドベンチストの名を名のる一団が（幻に）現れ、彼らは、『我々を特殊な民とする旗じるしやしるしを、それ程きわだって揚げるべきではない』と勧めていた。彼らは、我々の機関が成功を収めるために、それは最善の策ではないと、主張した。この独特な旗じるしは恩恵期間の終了まで、世界中至る所で揚げられねばならない。ヨハネは、神の残りの民を描写して次のように述べている：『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』（黙示録 14:12）。

これが律法であり、福音である。神の律法を犯し、神の記念日を台無しにし、不法の者の名を揚げる日に威厳を与えることにおいて、世と教会（複数）は一致して働いている。しかしあなたの神、主の安息日は、従順な者と不従順な者の違いを示す、しるしとなるのである。ある者達が旗じるしを除いて、その重要性をあいまいにするために働きかけているのを、私は見た。…」（セレクトッド・メッセージ第2巻、385頁）

「世界中にもたらされる論争点は、恐るべきものである。神の戒めに戦いを挑むために結集される地上の勢力が、獣の刻印を持たない者はみな、物を買うことも売ることもしないと言う法令を出し、ついに、その刻印を受けることを拒む者には、死刑の宣告を発するであろう（黙示録 13 :15,17）。神の言葉は次のように宣言する：『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や

手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる』(黙示録 14:9、10)と。しかし、真理が知性と良心に訴えられ、拒絶されてしまうまでは、誰一人神の怒りに触れることはない。光と知識が豊かに注がれている我が国の教会においてさえ、まだこの時代のための特別な真理を聞く機会に恵まれていない人々が大勢いる。まだ彼らには、第4条の戒めの義務が正しく呈示されていないのである。イエスはすべての人の心を読まれ、すべての人の動機を試される。人々がその本質を知らぬまま、法令が打ち出されるべきではない。分かった上で決断を下すために、すべての人に十分な光が与えられなければならない。安息日がすべての人の忠誠心を試す、大いなるテストとなるであろう。なぜなら、安息日は真理の中でも、特に大きな論争点だからである。」(霊の賜物第4巻、大いなる叫び 422、423 頁)

「我々が義認されるところの義は、帰されるものである (imputed)。我々が聖化されるところの義は、分け与えられるものである (imparted)。前者は天国に入るための我々の資格、後者は天国に入るための我々の適性である。」(私を生かす信仰、116 頁)

訳: 砂川 満



サンライズミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

Tel.0980-56-2783 | Fax.0980-56-2881

HP: www.sunriseministry.com | E-mail: info@sunriseministry.com